

## 相手意識を持つことで育まれる表現力

～伝える相手を意識しながら新聞を書いたり、  
互いに見合って話し合ったりすることで伸びる表現力～

指定校 2 年次 大桑村立大桑小学校 加藤恵子 元下漢、荻村智史、原亜珠美、増澤直美

### 一 本校の新聞活用、N I E の現状

本校は、N I E 指定校として、昨年度から研究をすすめてきている。昨年度は、まだよくわからない中で、本校児童の実態を踏まえながら、以下の点を大切に、新聞をとりあえず「書いてみる」ということを実践した。

本校の実態として挙げられたのは、以下のことである。

- ・ 普段、文章（作文、日記、感想文など）を書くことに抵抗がある。
- ・ テーマがあっても何を書いたらよいかわからない。
- ・ 自由なテーマで文章を書くときに、なかなかテーマが決まらない。
- ・ 出来事の羅列やあらすじで終わってしまう。
- ・ 内容を短文で要約することが苦手。

このような実態を受けて、次の 3 つのねらいを決め出し、じっさいに新聞を書く単元がある 4 学年を中心に研究を進めてきた。

- ①新聞に興味関心を持つ。
- ②新聞づくりのコツを学ぶ。
- ③新聞づくりを通して意見交換をする。

4 学年では、日常生活や行事について個人の新聞づくりをしたり、長野市見学についての壁新聞を作って互いに見合い、見出しを検討したりという学習を行ってきた。そして秋の公開授業では、班で作成した壁新聞の見出しについて検討を行った。子どもたちは意見を出し合い、話し合いを深めながら記事にぴったりの見出しを考えていった。

その授業を参観しながら、「新聞を書く」ということが「文章を書く」ことができるようにするだけでなく、コミュニケーションを図る一つのツールになっていることを改めて感じさせられた。ねらいの「③新聞づくりを通して意見交換する。」の部分である。まず、新聞を書く活動によって、『人と人がつながり』、『情報を共有し合える』のだということをも 4 学年の公開授業を通して知った。また、一生懸命書いた新聞を『人に読んでもらえる』ことに喜びを感じ、「もっと多くの人に読んでもらえるようにより良い新聞にしよう。」ということや、「どんな記事を書いたら、楽しく読んでもらえるのか。」「どんな見出しをつけたら人の目を引くのか。」などを子どもたちが感じながら新聞づくりを進めていることが分かった。

このようなことに視点を向ければ、低学年でも新聞を書くことができるのではないかと考えて 1 学年でも新聞を書いてみた。1 年生では 3 学期に自分の小さい頃のことや入学してからの 1 年を振り返ってみて、様子を思い出しながら書いたり、1 年間でできるようになったことを記事に書き表したりした。子どもたちは、出来上がった新聞を互いに眺め、読み合って、「こ

んなことがあったんだね。」とにこにこしていた。また廊下に掲示すると、他学年の友達が読んでくれたり、懇談会の最中ということもあって保護者の方が読んで褒めてくれたりし、子どもたちの口からも、「貼るのは恥ずかしいなと思ったけれど、読んでもらってうれしい。」という言葉が漏れた。何よりも驚いたのは、普段作文や日記を書くことが苦手で、困難さを示す子どもたちが、意欲的に新聞を書いていたことだった。

また、「話すこと」が苦手で、普段、自分の考えや気持ちを口に出して表現することがなかなかできない子が、新聞記事をたくさん書き綴っている様子があった。また、書き上げたものを友達に読んでもらう中で、「上手に書けているね。」と言われて、にっこりする姿があった。

このような実態の中で、2年次では、1年次のねらいの③「新聞づくりを通して意見交換する。」に焦点を当て、「新聞を書く」ことに“相手意識”を加えることで表現はどのように変わるのか、また、“相手意識”を持って互いに記事を見合って検討し合うことで表現力はどのように向上するのかを研究することにした。

そしてさらに、本校の学校目標の一つである、コミュニケーション力『伝えよう、聞こう』の向上を図ろうと考えた。

## 二 実践のねらい（育てたい力）

### 1 今ある子どもたちの姿（このような子どもたちに）

- (1) 日記や作文等、文章を書くことが苦手で抵抗がある子。
- (2) 思いや考えを文章で書くときに、どんなことをどんなふうにかいたらよいかわからず、分かりやすく伝えることができない子。
- (3) 話すことが苦手で自分の気持ちや考えを表現することに抵抗を示したり、伝えることを諦めてしまったりしている子。

### 2 こんな指導の工夫をして（手立てをして）

- ①新聞を通して、互いに見合ったり、話し合ったりするコミュニケーションの場を作る。
  - ・個々に新聞づくりをしたり、グループで一枚の新聞（壁新聞）を書き上げたりする。
  - ・個人の新聞づくりにおいて、書き上げた新聞を互いに読み合って感想を述べ合ったり、グループで壁新聞を作成する中で、話し合ったりする。
- ②子どもたちが新聞に親しむことができる環境を設定する。
  - ・全校の子どもたちが新聞に興味を持てるように、子どもたちの目を引く閲覧コーナーを設ける。本校では、子どもたちが登校したらすぐに目につくよう、児童玄関前と2階の踊り場にコーナーを設置。

### 3 願う子どもたちの姿（このようになってほしい）

- ・自分の考えや思いを、言葉や文章で相手に伝えることに楽しさやおもしろさを感じてほしい。
- ・自分の考えを伝えたり、相手の考えが自分に伝わったりすることに喜びを感じ、次の学習への意欲を高めてほしい。
- ・「相手に伝えたい。」という意識を持つことによって、「より分かりやすい」「より見やすい」ことを心がけながら表現しようとしてほしい。

### 三 研究の概要

2、3、4、5年生において、授業の中で、「新聞」を扱った学習を取り入れた。テーマはそれぞれの先生方に決めて頂いたが、行事や社会見学などのまとめとして書き、低中高学年で表現力がどのように変わっていくのかを見た。

#### 【事例1】2年生「新聞を書くことでコミュニケーション力や書く力が培われたA児」

2年生のAさんは、特別支援学級に入級している。友達と言葉でコミュニケーションを取ることが苦手であり、自分の気持ちを伝えることが少なく、黙ってにこにこしていることが多い。快の際は笑顔で、不快の際は泣くというように喜怒哀楽で気持ちを表現することが多かった。

文章を書くことも当然苦手であり、行事の作文を書いたり、休み中の日記を書いたりするときは鉛筆を持っている手が止まり、声をかけても1時間そのままにいることもあった。

1学期の5月、『今週のニュース』という国語の単元を発展させて、班で「壁新聞」を作った。4、5月で心に残ったできごとを班で話し合っただけで人数分決め出し、一人一記事を担当し大きな模造紙に新聞を書いた。模造紙を切り分け、書いたらその記事を同じサイズの模造紙に貼り付けるという手順である。A児も支援学級の先生に協力を頂きながら書き進めた。

書く際は苦勞していたが、班の全員の記事が合わせられ、その中に自分の記事が入ると、歓声を上げていた。発表の際は、自分の分担のところをゆっくりだが着実に読み、友達の感想をにこやかに聞いていた。

行事や長期休み中のできごとなど月に一度は新聞を書くようにし、書いたら友達が読んで感想を書いてもらう活動を行った。A児は文章を書くことに戸惑ってはいたが、「どんなことを書きたいか。」を尋ねると、「〇〇のこと。」と答えられるようになり、それを教師が文章化すると、懸命に鉛筆を走らせた。

回を重ねていくと、A児は友達の新聞をじっと見るようになった。ある活動の際、友達が絵を描いたり、見出しを丁寧に色づけしているのを見たりして、「僕もそうしよう！」と言い、絵を描いたり、色づけをしたりし始めた。さらに、次の活動では、「こんな題(見出し)にしよう！」とつぶやいて、自ら見出しを書く様子が見られるまでになった。

#### 【事例2】5年生「“伝えたい”気持ちが書く力につながったB児」

特別支援学級に入級しているB児は、文章を書くことを苦手としている。社会見学等活動のまとめなど、作文等を書くことには難しさがある。そこで、活動のまとめを新聞に書くことを考えた。普段使っている新聞のサイズであると、小さな文字を書くことが難しいため、支援学級の担任と相談し、新聞の形式を取り入れ、模造紙のサイズにまとめることにした。

B児は、文字の丁寧さや見て楽しいレイアウトを意識しながら、活動のまとめ新聞を書き上げた。書き上げて壁に貼ってみると、とても良い出来栄であり、満足な表情を浮かべていた。さらに、それを「多くの友達に見てもらいたい。」という願いを持ち、全校児童が通る廊下の壁に貼ることになった。

B児の新聞を掲示したところ、多くの子どもたちがその前で足を止め、じっくりと記事を読む様子が見られた。その様子をB児に伝えると、B児はとても喜び、次時の学習への意欲を高めた。

#### 【事例3】2、4年生「新聞を見合うことで相手意識を高め、次の新聞につなげる」

本校では、2、4年生は姉妹学級である。そこでそれぞれの学年の発達段階に合わせて「新聞を書く」ことを授業の中に取り入れ、学年を越えてそれを見合う活動をした。(写真参照)



2年生は、「今度も4年生に読んでもらうんだ。」「もっと丁寧にわかりやすい字で書こう。」という意識を持ち、また4年生も「新聞は相手に伝わるように書かなくてはならない。」「見出しをインパクトがあるようにもっと工夫していかなければならない。」等を2年生にアドバイスしている姿があった。

【事例4】3年生「互いに付箋にコメントを書いて貼っていく活動を通じたC児の姿」

C児は学習内容の理解が難しく、文章を書くことにも苦手意識を持っている。体験したことを作文等にまとめることも気乗りしないことが度々見られる。そこでC児がより書くことに興味を持てるよう、新聞にまとめることを提案した。

初めて新聞を書いたときは、どのように記事にまとめたらよいかを考えることが難しい様子があった。しかしながら、新聞を書き上げ、それを友達に見てもらい、感想や意見の付箋を貼ってもらおうと、それを笑顔で見つめ、読んでいた。

次の新聞の活動からC児の変化が見られ、これまでよりも流暢に書き進める姿があった。

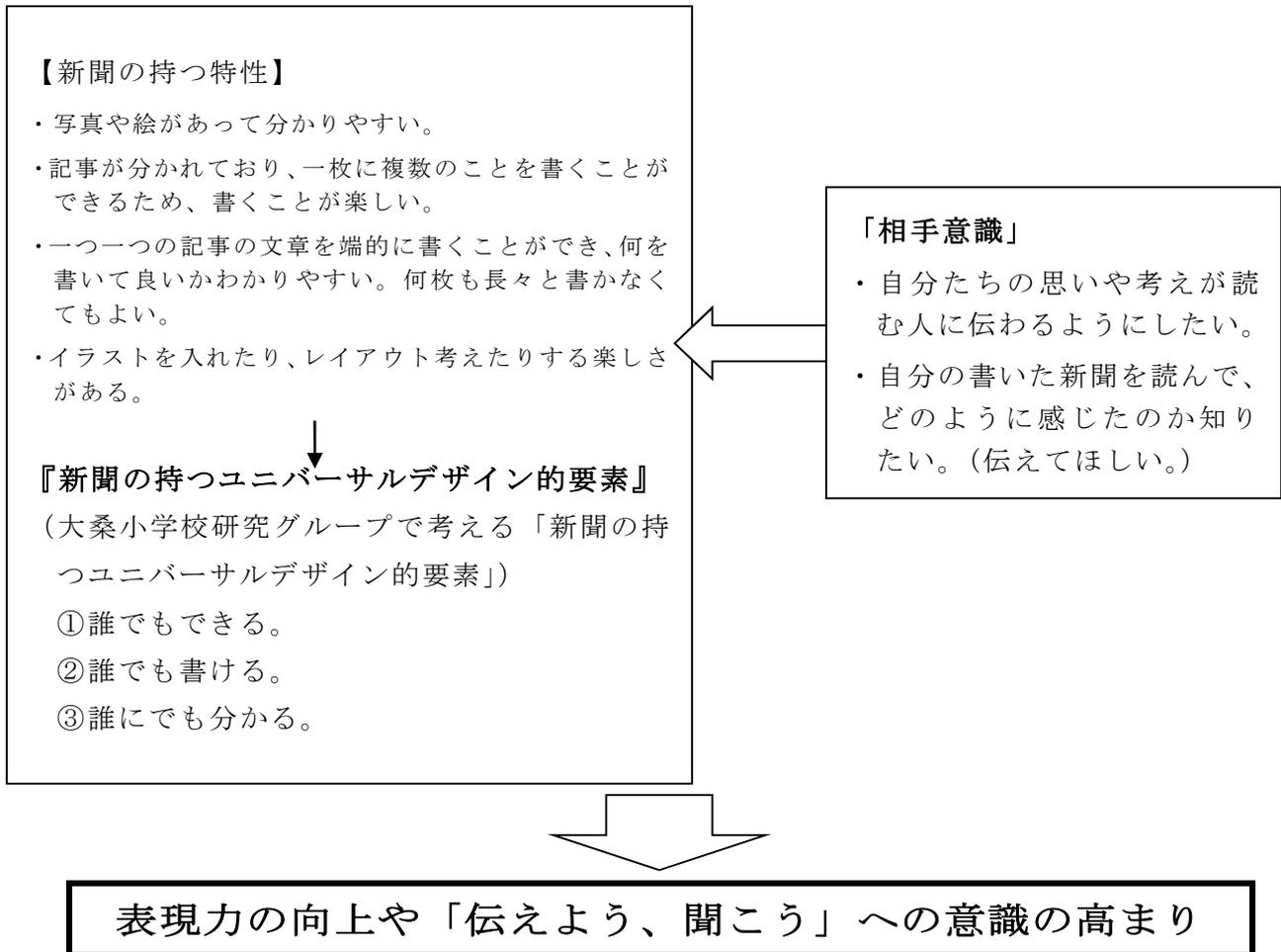
事例1、2でのA児、B児の姿から、書いた新聞を掲示して見てもらったり、書いたものを見合ったり、発表して感想を述べ合ったりすることでA児、B児の中に自然と“相手意識”が生まれ、それが次のようなことにつながったのではないかと考える。

- 「書いてみよう」という『やる気』
- 「友達に認められてうれしい。」という『自信』
- 「次も書いてみよう。次はもっとこうしてみよう。」という『向上心』

また、事例3、4のように2、4年生の姉妹学級で新聞を見合った活動を通して、2年生の考えを4年生が読んで、コメントを書いてくれたうれしさを感じたことや4年生の書いた新聞を見ながら、内容は読めなくても見出しや写真、絵を見て内容がわかったことの喜び、友達に読んでもらい、コメントをもらったことなどが次への意欲やステップアップにつながっていることを知った。また、事例1、2、4のように文章を書くことに苦手意識がある児童にも、新聞に書き記すことで活動を振り返り、それを友達に伝え、それを認めてもらうことでコミュニケーション力や自尊心を高めることができることも分かった。

「新聞を書く」ことができなければ、このようなコミュニケーションは成り立たなかったこ

とを考えると、新聞には、「ユニバーサルデザインの要素」が多分に含まれているということが分かる。「新聞の持つユニバーサルデザインの要素」について、大桑小学校研究グループでは、下記の図中の3つの点について打ち出した。



まとめると「新聞の持つ特性」、いわば「新聞の持つユニバーサルデザインの要素」に「相手意識」が加わり、より「表現力」や「コミュニケーション力(伝えよう、聞こう)」を高めているということが実践から見て取れた。

このような考えをもとに、4年生で次の事例のような活動を行い、その中で公開授業を行った。

**【事例5】** 4年生「デイサービスセンターを訪問して、お年寄りと触れ合い、新聞を使ってお年寄りに学校のことを知ってもらい、さらに関わりを深めていく事例～『デイサービスセンターのお年寄りとかかわり合おう』～」

本校の4年生は、「総合的な学習の時間」で地域のデイサービスセンターのお年寄りの方々と交流を行った。実際に何回か訪問に行き、お年寄りの方々と接する中で、子どもたちはお年寄りの方々の持つさまざまな願いに気が付いた。具体的には、次のようなことである。

- ・もっと地域の子どもたちとかかわりたい。
- ・もっと学校のことを知りたい。
- ・今の子どもたちがどんなことをし、どんなことが好きなのかなどを知りたい。

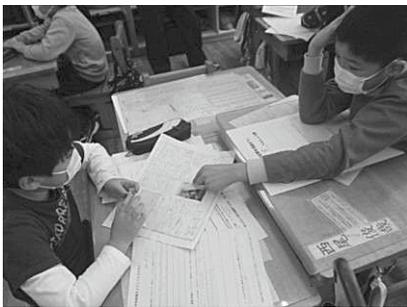
しかし、日常の教育活動の中での訪問活動の回数には限りがあり、何度も赴くことは難しい。



		評価：話し合いをすることで、読み手のことをより意識した新聞作りにつなげようとしたか。(C-②) ※	
まとめ	4本時話し合ったことを確認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>• これでもっとわかりやすい新聞になりそうだな。</li> <li>• 自分たちではわからないことがお家の人に聞いてわかってよかったな。</li> <li>• 早くデイサービスの人に届けたいな。</li> </ul>	5 ・ワークシート

※C-②…「総合的な学習の時間」の「C他者や社会との関わりに関すること」の評価②を「②グループでの話し合いの中で、友達と意見を交換し、新聞をより良いものにしようとする。」とした。

子どもたちは、それぞれのお家の方から出された意見を読み返し、記事の工夫の検討を行った。読み手を意識して、検討し記事を書き直して新聞を作り上げた。



できた新聞をデイサービスに持って行き、記事について発表したり、新聞をもとにしてお年寄りの方々と会話をしたりして交流活動を行った。新聞を媒介にして、それを話題にしながら楽しい交流の機会となった。

【事例6】5年生「新聞を使って地域に情報を発信する」

5年生では、「総合的な学習の時間」で学校の様子や学校の歴史について新聞にまとめた。子どもたちは、「もっと多くの人に学校の行事を見に来てもらいたい。」「地域の人々に学校が楽しいところだと知ってもらいたい。」という『より多数への相手意識』を持って取り組んだ。

地域全体の人々のことを考えての新聞作りでは、より想像力や表現力が求められる。子どもたちは、「どんな記事を書くか」について充分考察し、書く記事を決め出した。そして「記事を

書くためにはどんな人、どんなところに取材をしたらよいか。」を考え、自分たちで依頼文を考えたり、自主的に連絡を取って尋ねたりした。

こうして作り上げた新聞を、村内のいろいろな場所に掲示し、より多くの人に読んでもらうことを考えついた。



掲示した場所は、村内の三つの駅の構内や高齢者福祉施設、村役場、中学校、病院、道の駅など、多くの人が集まったり、利用したりする場所であった。子どもたちは、新聞を掲示する場所の近くに感想用紙とそれを入れてもらう袋も設けた。

数日後、掲示の御礼と感想用紙の回収に行った。袋の中には多くの感想が寄せられており、多くの人々が新聞を読み、関心を持ってくれたことが伺えた。それを読みながら子どもたちは活動を振り返り、さらに書く内容や表現を工夫することを学んだ。

#### 四 研究のまとめ

「新聞を書く」ということに、“相手意識”に重点を置くことを加えるだけで、活動の幅がとても広がることを実感できた研究であった。さらに学年が上がる毎に、その相手意識はより広い他者に向けられることも分かった。

低学年…家族、友達、学校の児童など身近な人に新聞を読んでもらいたいという相手意識。

高学年…地域の施設等、特定の人に読んでもらいたい、また不特定多数の人に読んでもらいたいという相手意識。

そしていずれの学年も、表現力やコミュニケーション力を高めることができたことが、研究の大きな成果である。

#### 五 今後の課題

「新聞を書く」ことに重点をおいて取り組んできた。「新聞を書く」ことに関しては、研究の十分な深まりがあったが、「新聞を使う」「新聞で学ぶ」ということについては、今後、さらに研究を深めていく必要がある。

「新聞を書く」ことに「相手意識」という視点を加えたと同じように、「新聞を使う」「新聞で学ぶ」という活動も、そこに何か視点を加えると、一つ一つが奥が深いものになってくる。

今後は、焦点を絞りながら、それぞれに目を向けて活動を考えていきたい。